

来年の第48回国連人口開発委員会は、「望む未来を実現する：人口課題を持続可能な開発に統合し、ポスト2015年開発アジェンダに取り入れる」というテーマで行われることとなり、ベルギーが議長国、副議長国はアジアからイラン、東欧よりセルビアと決まったが、アフリカ、中南米は未定である。

なお会期中には昼休みに多くのサイドイベントが催され、筆者はモルドバ主催の「人口変化と開発過程を結ぶ」というイベントの中で、「経済発展と健康な人生に資する人材に対する投資 - 日本における健康・教育・雇用のケース」と題するプレゼンテーションを行った。日本の発展に、人材開発が重要な役割を果たしていることは国際的によく知られており、新興国にとっては日本の経験に興味があるだろうと、明治期からの教育水準の推移や1960～70年代の人口ボーナス、5S/TQM・現場主義の紹介、寿命の伸長と国民皆保険、といった事項の歴史的推移を中心に紹介した。主催国のモルドバやスピーカーであったルーマニアでは人口流出・低出生率による人口減少が進行中であり、若者の人材開発について、現代的な人口減少の文脈において日本が共有すべき情報や課題も多いのではないかと思われた。

高齢化に関するサイドイベントは二つ開催された。一つは国連社会政策部・人口部・統計部の共同主催「エビデンスに基づいた高齢化に対する政策形成」、もう一つはメキシコ主催の「人口高齢化と健康・経済・家族システムへの影響」である。

前者では国連社会政策部・人口部・統計部による共同プロジェクトが立ち上げられ、今後の国際的な開発目標に高齢化問題を組み入れていくためにまず必要となる高齢者の年齢別データの整備を今後行っていく予定であるとの説明があった。世界的な人口高齢化は家族構成の変化をもたらすがその状況にどう対応するのかという筆者の質問に対して、国連人口部ホルヘ副部長より、独居老人は子どもや他人に従属せず独立して生活を営むことができるという意味で、ポジティブに認識するべきである、という回答を得た。なお、2002年に開催されたマドリッド高齢者問題世界会議のフォローアップ会議は今のところ未定とのことであった。

メキシコ・サイドイベントではメキシコにおける高齢化の状況、特に高齢者を支えるのは家族であり、高齢者施設はほとんど整備されていない状況、他殺による死亡率は高齢になるほど高いという統計が示された。またパネリストとして登壇したヘレン・ハムリン国際高齢者団体連盟（IFA）国連主要代表はポスト2015年開発アジェンダやSDG（持続可能な開発目標）の中に人口高齢化問題を組み入れていくことが重要である、と述べ、会場からの同様のコメントに応じた。

（国連決議文はや本会合に関する書類はすべて国連のwebで公表され、会議ビデオも閲覧可能である。）

（林 玲子 記）

アメリカ人口学会2014年大会

アメリカ人口学会（Population Association of America）の2014年大会が5月1日～3日の日程でマサチューセッツ州ボストンにて開催された。今次大会は2,200人近くが参加した。ペーパーセッションは合計で227あり、各セッションに対して4つの報告がなされた。分野ごとには、「出生・家族計画・性行動・リプロダクティブヘルス」（35）、「結婚・家族・世帯・連帯」（29）、「子ども・若者」（19）、「健康・死亡」（44）、「ジェンダー・人種・エスニシティ」（9）、「移民・都市化」（18）、「経済・労働力・教育・格差」（24）、「人口・開発・環境」（13）、「人口・高齢化」（14）、「データ・方法論」（16）、「応用人口学」（6）となっていた。日本ではあまり多くない健康・死亡のセッションも全体の約2割を占めており、健康・死亡研究の現状がわが国とは大きく異なっているのが印象的である。また、ポスターセッションは9セッション（各90報告程度）設けられていた。同学会では、ほぼ同規模

の大会を毎年開催しており、世界の人口学における研究動向を知る上で貴重な機会を提供している。

当研究所からは、石井太人口動向研究部長、岩澤美帆人口動向研究部室長、菅桂太国際関係部室長、是川夕人口動向研究部研究員、鎌田健司人口構造研究部研究員と筆者の6名が参加した。このうち、石井部長がセッション Models for Mortality Analysis にて “Analyzing the Trends of the Modal Age at Death Using the Linear Difference Model”，岩澤室長がセッション “Fertility Intentions and Influences Upon” にて “The Role of Gender Preference to the Third Birth in Japan: Magnitude, Trends and Implications” の報告を行った。ポスターセッションでは、岩澤室長が “Remarriage in Japan: A First Look”（ウィスコンシン大学・レイモ教授との共同報告）、菅室長が “A Multistate Lifetable Analysis for the Effects of the 1st Marriage and Marital Reproduction on Fertility in Singapore”，是川研究員が “Immigrant Occupational Attainment in Japan and Its Determinants: Is It a “Structured Settlement”?”, 鎌田研究員が “Regional Childcare Availability and Individual Reproductive Behavior: A Multilevel Analysis of Second Births in Japan” と “Spatial Variations in Covariates on Marriage and Marital Fertility: Geographically Weighted Regression Analyses in Japan”，筆者が “Achieving Desired Family Size in Japan: Socio-Demographic Causes of the Discrepancies” の報告を行った。

年次大会の開催期間中には、これらの通常のセッション以外にも特別なセッションがいくつか開催されるが、これらの中には2020年米国センサスにおける考え方をセンサス局長が解説する “Innovations in 2020 Census” など興味深いセッションが見られた。また、筆者らが参加した「人口・高齢化」のセッションでは、65歳以上を高齢人口とする従来の定義に対し、平均余命が15年となる年齢を高齢人口と定義し直し、従属人口指数をはじめとする各種人口指標を計算しなおす試みなどが示され、大変興味深いものであった。

(福田節也 記)